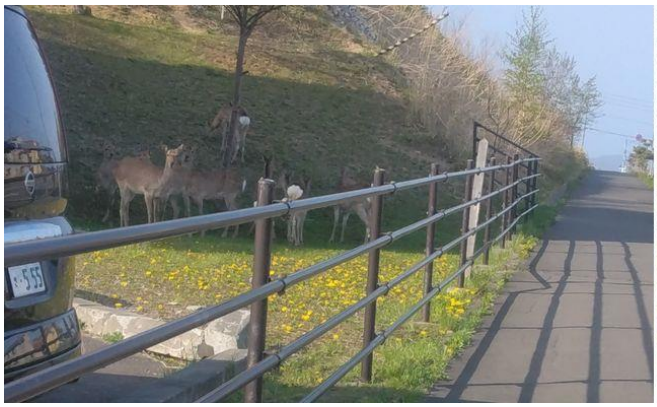
おじさんズ通信

２０２２年５月号（Ｎｏ１８）
発行元：登別市新生町４丁目桃柿通
緑風舎
発行者：おじさんズ３号

散歩すれば

シカたちに出会った



「あれ？　アニマルセラピー用のポニーでも飼ったのかな」

「こどもの日」の５月５日夕方、散歩の定番ルートを歩いていると、ケアハウスや養護老人ホームなどの建物が一体となった施設敷地の片隅に、四本足の動物がたむろしていた。馬かと思ったがすぐに、この地域周辺の市民権を既に得たぞ、といわんばかりに堂々と芝生の植物を食むエゾシカの群だと気づきました。

今更驚くほどの野性動物ではないが、その数に唸りました。「イチ、二、サン…」。数えてみると９頭もいるじゃないか。ガラケーから乗り換えたばかりのスマホを取り出し、少し近づいてはパシャリ、また近づいてはパシャリ。

しかし彼等もまた、このご時世を心得てかソーシャルデスタンスよろしく、カメラを向けて近づくと一歩、二歩後退して距離を保ちつつ、小高い丘の斜面を登り始めました。あの白いハート型のかわいいお尻を向けながら。

１，２年ほど前、このあたりの片側２車線道路で車を運転していたら、海側から跳躍しながらドドッと道を横断する鹿の群に遭遇。ひとつ先を行く車が急ブレーキをかけ、衝突の惨事は免れたが、ヒヤリどころではなかったでしょう。万一、衝突して弁償を求めるにしても相手が相手だけに、シカたないとあきらめるシカない？

Ｗｅｂでミュージアム

登別にも映画館４館時代が

鷲別劇場、登別映画劇場、幌別映画劇場、登別座。１９５０年（昭和２５年）、現在の登別市内には映画館が４館もありました。その１０年後の小学校６年時にも、幌別で映画を見た記憶がありますが、さて、主演は石原裕次郎だったか、小林旭だったか。

このデータはネットのブログ「消えた映画館の記憶」から拝借しました。出典が「映画年鑑 戦後編 11 1950 年版」（日本図書センター）とありますから、まず間違いないようです。

もちろん、この年室蘭市内には９館もあり、伊達市内には伊達劇場と共栄座の２館、さらに豊浦劇場（豊浦町）、万歳座（虻田町）の名前がありました。敗戦の傷心も徐々に癒えて、娯楽を求める人々が劇場に足を運び、真剣な表情でスクリーンに食い入る姿が浮かんできます。

「消えた映画館の記憶」では、戦前からの全国の映画館の歴史を記録しており、とてつもない作業に挑んだブロガー氏の労苦には、ひたすら頭が下がります。

ウェブでミュージアム

この地方の映画館の歴史を調べようと思い立ったのは、先月の通信でも書いた「帰ってきたキネマ旬報」に関係があります。

できれば、どこか建物の一室を借りて常設で映画好きの人に読んでもらいたいのですが、なにしろ先立つものが…。

そこで、このプランは後回しにして、ネット上で、戦後のキネ旬を紹介することと相成りました。こうな

ると欲望の波紋は広がるもので、ついでにこの地方の映画館の歴史も掲載し、できれば写真も載せたいと、資料探しの旅にちょっぴり心を躍らせています。何か、手掛かりがあれば、ご一報をお願いします。

「ピリカチカッポ」

おじさんズ通信 No16（３月号）でも紹介した室蘭出身のノンフィクション作家・石村博子さんの新しい著書・ピリカチカッポ（美しい鳥）　知里幸恵と「アイヌ神謡集」（岩波書店）が４月下旬に発売され、早速、知里幸恵銀のしずく記念館に出掛けて買い求めました。

まだ、読んでいる途中ですが、読了したとて書評などおこがましいので、帯に刻まれた文章でいささか本の紹介を。

「知里幸恵というアイヌの少女がいた。１９０３（明治３６）年北海道に生まれ、祖母からユカラ（叙事詩）などアイヌ文化を伝えられる。～略～享年１９。残された唯一の著書『アイヌ神謡集』は、アイヌの手で初めて書き下ろされたアイヌ語のテキストというばかりでなく～略～数十年間、忘れられ顧みられなかった幸恵と『アイヌ神謡集』は、ある時点から再び姿を現し、人々の心を揺さぶり、記念館まで建てることになった」

ご一読をおすすめします。最後に、９月２４日（土）の「知里幸恵フォーラム」で、石村さんが講演する予定です。詳しくは、記念館（電話０１４３－８３－５６６６）まで。

「手指の力をまだあるの」

と、目の前に据えた干物のスケトウダラがもうすぐ７４歳になる老人に言い放ち、せせら笑っています。

これから、両手指に１２０％の力を込めて、カチンカチンになったカンカイの兄貴の解体作業に挑戦です。

最初は多少捩（よじ）れている硬直した体をさらに捩って、柔軟体操をほどこし、頃合いをみて皮はがし作業。さあ、その後が大変です。下腹をこちらに向けながら、両手指で身を左右に開くのですが、これが難行苦行。数度の執刀の末、最後は「えぃ！」と気合を入れると、ぱっくり開きました。

「うむ、俺の老人力は健在だ」と言いながら、奮闘努力の末、むしり取った身にマヨネーズをチョンと付けてムシャリ。ぐいとビールを流し込むと、最高です。北海道人の至福のひととき、ここにあり。

薫風　烈風

▶ボランティア的お手伝いをしている登別市立図書館がこの５月で、開館５０周年の節目を迎えました。半世紀の誕生祝いとなると、それなりの記念行事やイベントを想像しますが、あいにくのコロナ禍で講演会など人が集まる企画は見送りのようです。もっとも、誕生祝いは当の本人（図書館）ではなく、周りの人々が企画するもの。わたくし的に何か出来ないかと考えましたが、とりあえず今回の「おじさんズ通信」紙上にて、お祝い申し上げました。

▶「うちみたいに、優しい会社だったらいいけどさ」。近くにあるＳドラッグストアの店内でレジに向かう途中、店員さんの一人がほかの二人に発した言葉が耳に残りました。（そうでない会社とはどこだ？）なんて下衆の勘繰りはせず、通り過ぎました。

著名な方の本に、こんなことが書かれていました。

倉庫が火事になり全焼した。駆け付けた社長の最初のひとことがこの会社に残るべきか、否か、社員の進むべき道を分けました。

Ａ社長「みんな、大丈夫か。けがはなかったか」

Ｂ社長「中の製品は大丈夫か。持ち出したか」

よほどのへそ曲がりでない限り、どちらを選択するべきか、お判りでしょう。

「カンパニー」の語源は「共にパンを食べる」ことか。

▶ガラパゴス携帯から、ついに先日スマホに乗り換えましたが、ここだけの話、パソコンやインターネットの知識がないお年寄りは、店側から商品を提示されるままに出費を重ねるのだな、と実感しました。メモリーカードや充電器など付属品のことです。提案書を見ると、分割払いの１カ月単位だと数百円でも、４年間だと１万円は軽く超えます。

もちろん、「自分で用意します」と伝え室蘭の電器店へ。野口英世さん２人分で調達は完了し、画面の防護フィルターは百均製品で十分でした。年金爺さんの闘いは続くのであります。では皆さん、お元気で～。